

まちづくり ひろしま

第43号 (令和元年9月15日)

読者数：646名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

□ 巻頭言

基町プロジェクトのご紹介

広島市立大学芸術学部准教授 中村 圭



2013年7月(平成25年)、「**基町住宅地区活性化計画(以下、活性化計画)**」が策定されました。現在、広島市はこの活性化計画に基づき、地区住民等と協働して地区の活性化に取り組んでいます。また、2018年(平成30年)12月には、「**将来を見据えた基町地区のまちづくりビジョン(以下、まちづくりビジョン)**」が発表され、これを実現していくために、2019年(令和元年)現在、地区住民や広島市職員により、活性化計画の改定作業が進められています。なお、各種資料は、広島市ウェブサイト「**基町地区活性化計画協議会**^(注1)」で公開されています。

基町住宅地区の象徴的な建築である基町高層アパートでは、住戸改善工事が進んでおり、残り数年で、全ての住戸が綺麗で機能的な住戸になります。制度上も、若年世帯や学生などを対象とした特別入居枠が設けられるなど、多方面から地域を活性化しようとする取組が行われています。活性化計画に掲げられた取組は、広島市と地域が取り組むもの両方がありますが、広島市は全体の実施率を53.5%(短期的な取組み)と自己評価しています。

活性化計画に掲げられたメニューは数多くありますが、その1つとして「**基町アートロード、アートによる魅力づくり**」があります。2014年、この取組の実現を目指すために、広島市立大学と広島市中区役所によって、**基町プロジェクト**が開始しました。そして、私は市立大学のメンバーとして基町プロジェクトの立ち上げ当時から現在まで、その中心的メンバーとして基町住宅地区に携わってきました。前置きが長くなりましたが、基町プロジェクトの位置付けがご理解いただけたかと思います。

さて、プロジェクトの基本的なアイデアは、現地にプロジェクトの拠点「**M98**」を設置し、地域で学生や若い人が**<何かを手で作る場>**をつくる。そして何かを作っている**<過程とその様子を重視>**することにあります。これまで、**<学ぶ><創造><交流>**を基本テーマとして、様々な取組みを行ってきました。特に若い学生をはじめとした、これまで基町住宅地区に足を運ぶことがなかった多くの方々に、実際に基町に来ていただく機会を作ってきたことには大きな成果を感じています。また、私自身も地域の方々との交流を通じて、これまで知ることのなかった広島を学ぶ機会を得ました。

具体的な記録やエピソードは、プロジェクトのウェブサイト^(注2)やFacebookで公開していますので、是非ご覧いただきご意見をいただきたいと思ひます。

基町には様々な難しい課題があると感じますが、歴史の成り行きとして必然的に現われたそれら諸課題にどのように取り組むか、また、限られた人しか知らない地域の魅力をどのように活かすか、という視点に立てば、これらは可能性の種のようにも見えてきます。

そうした可能性を探り続けるため、現在、基町プロジェクトの基本コンセプトの見直しを行なっています。その背景には、まちづくりビジョンの重点取組項目17件の1つとして「**基町プ**

プロジェクトの充実」が掲げられたこともあります。

このプロジェクトは、中区との共同事業であるため、ここに改定内容に関する具体的なアイデアをご紹介することができないのが残念ですが、基町の歴史を学び、そこから新しいものを作り、そのプロセスや成果が地域の内外をつなぐ、という大きな方向性は維持されるでしょう。また、基町住宅地区の歴史を考えると、周辺エリアとのつながりは特に重要だと、個人的には考えています。

目下のところ、ポップアップショップとして使える店舗を整備したり、高層アパートの室内調査を行ったりと、実験的な取り組みを行いつつ、新しい方向を探っているところです。こうした実験を通じた考察を踏まえて、今年度末には、新しい基町プロジェクトの計画をご紹介できると思います。基町が希望のまちとなるよう、特に若い人が活躍できるような場をつくれるよう、これからも創意工夫していきたいと思っています。

(注1) 基町地区活性化計画協議会 <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1558587328832/index.html>

(注2) 基町プロジェクト <http://www.motomachiproject.net/>

ひろしまのまちづくりの動き

① 第5回 響け！平和の鐘祈念式 (実施報告)

- ◆ 日 時：令和元年8月6日(火) 9:30~10:15 台風の影響による雨
- ◆ 場 所：中央公園(ハノーバー庭園南広場)
- ◆ 主 催：響け！平和の鐘 実行委員会

市民約100人が参加して、最初に全員が黙とう。元広島市長・平岡 敬氏が初めて参加されて挨拶。「……鐘を鳴らす想いを平和活動につなげてゆくことが大切……この心が集まって核兵器廃絶が出来る」そして鐘を力強く打ち鳴らされた。

こどもの言葉は、鐘のデザインをされた郷土の日本画家・片田天玲画伯のひ孫・亀尾美結子さんが鐘への想いを心込めて朗読。

最後に広島合唱同好会の皆さん(30人)が「平和の太陽^(注)」を高らかに歌い上げた。

ぼくたちの世界	明るい世界	♪
わたしたちの未来	美しい未来	♪
世界に注ぐ	あたたかい光	ラララ・・・♪♪♪



(注) 平成7年(1995)に被爆50年記念事業「平和讃歌」国際公募でグランプリに輝いた。

作詞：ウワファ・マホメッド/作曲：マヘル・ムヘディン・メゼール

(実行委員会代表 高東博視)

○ 広島復興の軌跡・人物編(第18回)～寺光忠参議院議事部長(続報)

～広島への複雑な思いを抱き続けた司法の偉人～

既にまちづくりひろしま第40号(第15回)において寺光忠氏について言及したところであるが、なお言い足りないところがあり、ここ第18回にその続報として追記する。(本文は敬称略)

4. 寺光の構想：広島は揺るぎない理想の平和都市であるべきだ

寺光の内心には広島への複雑な思いとして、極めて現実的な側面からのものと、極めて理念的・空想的な側面からのものが絡み合っていて、一方的に片付けられないものがある。そのまず、理念的な思いから触れてみよう。

その最たるものは、平和都市法が成立しようというまさにその時、建設時報(国土建設研究会編昭和24年8月号、pp.6-11)によせて、寺光忠は「平和都市について」と題した「平和都市の構想」を、3つの構想として提案している。そのまま主要部分を引用してみよう。

構想の一 広島市の区域に一歩足をふみ入れた外来者は、そこに平和市民を発見する。和やかで端正な所作と美しい人情が、老幼男女のすべてについている。住民の心身の清潔さが街の

すみずみにまで浸透している。(中略)その一人一人が、すべて『理想主義者』であらねばならぬことになる。(以下略)

構想の二 平和都市の名にふさわしい国際平和の香気を全ヒロシマの空にふみこめば、その一木一草が恒久の平和を象徴して立っている。石ころの一つ一つまでが、世界平和を象徴してころがっている。(以下略)

構想の三 平和都市の建設は、戦災都市広島への復興をその目的にするものではない。平和都市法の本質の核心は、世界恒久の平和を象徴する都市をこの地上に創り上げたい、というにある。すなわち、平和都市は今日の問題であり、明日への問題である。(以下略)

このように、寺光にとっては、平和都市法は、戦災都市広島への復興を超えて、世界恒久の平和象徴都市の建設ということであり、広島では、「一木一草」「石ころの一つ一つまで」もが、平和を象徴して存在していなければならないというのである。

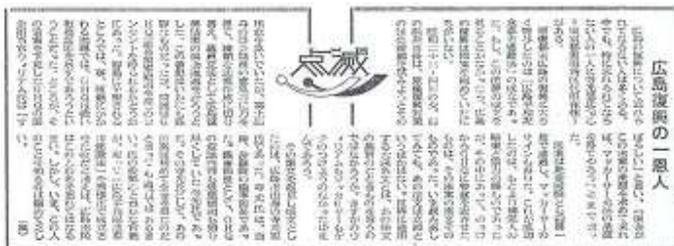
ところが、浜井信三はその著「原爆市長」(朝日新聞社、p.152)の中で、「この法のご利益はてきめんであった。法が公布されると、建設省はさっそく24年度の追加予算で、復興補助金を二千万ふやしてくれた。またGHQが、たまたま当時のエロア資金を、産業振興施設に使っていいと認めていたので、同省はその資金で、広島市の百メートル道路の平和大橋と平和西大橋を直営で架けてくれることになった。」と記述し、さらに続けて、「広島への平和記念都市建設法-これは、復興途上の広島にとって、現代の“打ちでの小槌”であった。ただこの打ちでの小槌は、鬼が落としていったものを拾ったものではない。これは原爆で死んでいったたくさんの市民の犠牲と、全国民のあたたかい同情と助力とによってあがなわれた小槌なのである。われわれは、このことを決して忘れてはならないと思う。(同著、p.154)」と、被爆被害への配慮をしめしつつも、平和都市法へ最大限の賛辞を贈っているのである。いかに理念的な都市建設の目標を説いても、現場での受け止めは現実的な効果こそが、平和都市法への評価であった。

浜井をはじめとして広島側の平和都市法への受け止めに対して、寺光が忠言し、警告しても、当時は寺光の苦言として純化され、昇華されて、浮遊したままであったと思われる。

5. 寺光の思い：広島はもっと自分を評価せよ、あるいはもっと感謝すべきである

一方、寺光は昭和25年6月、参議院議事部長職を辞して、第2回参議院議員選挙において全国区候補者として立候補したのである。前年の平和都市法制定時における住民投票時に広島市で7万1千票もの賛成票を得ており、長崎も特別法の制度により一定の枠組みに組み込まれたのであり、まさに特別法による都市づくりの精神的な支柱が完成したので、寺光の貢献は明らかと思われた。寺光が広島市民からの支持を期待したのも無理からぬものがあったかもしれない。ところが当時の広島市民・選挙民から1万票あまりしか獲得できず、あえなく落選した¹⁾。選挙とはまさに別の論理で動くものであり、寺光が期待するような支持は成立しなかった。寺光の大いなる読み違いであるが、寺光もまた選挙という現実性を勝手に解釈しての、すなわち現実離れした理想論でしか判断できなかつたということになる。

寺光は浜井の賛辞以後、広島からの連絡はなく、ましてや謝意らしい姿勢も見せてもらえず、長年不満を募らせていた。なぜ、広島は何の報告もせず、何の感謝もなく、よく過ごせるものだという思いであった。そのようなとき、昭和48年に田淵実男が寺光に連絡して訪ね、4月17日付中国新聞コラム「点滅」に、「広島復興の一恩人」を寄せていたことは既述した²⁾。平和都市法制定40周年時によく連絡網が成立し、平成元年6月(1989年)には制定40周年を記念して講演会が開催されて寺光が登壇した。しかし、その時寺光は心底からの思いを吐露したであろうか。あまりに、法案起草者と法施行集団・広島市民との乖離したままの思いの、数十年であったのではないか。



6. 当時の寺光の思いから新たな構築を!

平和都市法制定70周年を迎えた令和元年(2019年)、改めて平和都市法とどう向かい合うの

か、問われている。次は被爆 80 周年、さらに 100 周年が待ち構えている。立法時の寺光の思いはあまりに現実離れしていたが、復興を果たした今、都市づくりに新たな理念の確立が要請されている今、寺光の思いは拠り所として浮上するであろう。当然、現下の世界情勢も考慮に入れなければならない。広島が平和都市法で生かされてきたことに感謝するならば、改めて多くの、重要な目標と、アクションを展開すべき時期は今を置いてないことに気付くべきである。オリンピックや万博のような一過性のイベントを超えて、地に定着させ、真に世界市民から支持される道は必ず存在するはずであり、その道を模索することが寺光に対する真心からの恩返しといえるであろう。



平和都市法制定 70 周年を記念して将来の街づくりを話し合うワールドカフェ

脚注

1) 中国新聞（昭和 25 年 6 月 8 日付）によれば、寺光の全国区での総得票は、46,980 票であった。6 年議員としての当選ラインは 15 万票以上、3 年議員としても 14 万 4 千票以上を必要としており、寺光は落選者で 118 人目であり、到底太刀打ちできるレベルではなかった。この間のことは、中国新聞社編「炎の日から 20 年／広島記録 2」（pp. 303-309）に記述されている。

2) この中で特に「原爆都市広島の復興に大きく寄与したのは『広島平和記念都市建設法』の成立であった。もしこの法の成立を見ることがなかったら、広島の復興は困難を極めていたにちがいない。」「その案文を起草し成文としたのは広島市出身の寺光忠氏であった。」（中略）、「広島市民はこの人の名を忘れてはなるまい。」という指摘は示唆的である。

（編集委員 石丸紀興）

□ ほっとコーナー

モイロ 子供から孫へ

舞台照明家 木谷幸江

学生時代、文化祭照明係りの私は、灯り一つで夢も現実も美しく映せる舞台の魔法に魅せられ、舞台照明の世界に入りました。相変わらず忙しいながらも、心躍る充実した日々を過ごしていますが、何があっても力添えしたいと思うのは「平和への祈り」を伝える^{ステージ}舞台です。

奇しくも丁度 30 年前の 1989 年、広島の学生たちから、“ピースチャイルド”という、世界の子供達とミュージカルをしたいと相談を受けました。結果、元来世話好きの私は、照明だけでなく舞台関連全てを運営進行せざるをえなくなり、すっかりハマることになってしまったのです。

参加国は中国、ロシア、ベルギー、アメリカ、フィリピン、パプアニューギニア、台湾、韓国、と多彩で、合唱を含めると約 100 名規模、観客も 1000 人近くになり、「戦争のない平和な国を作ろう！」と子供たちと歌い上げました。この取り組みは 7 年続き、平和な世の中に浸りすぎたのか、残念ながら解散しました。しかしそれ以降、ヒロシマを通して平和への思いを発信することの使命感は、私の中に消えずに残ったのです。

そして今年 8 月。“ヒロシマの孫”という被爆者のおばあちゃん達のインタビューを元に、瀬戸山美咲さんが 5 年前に書かれた台本を軸に公演がありました。

“ピースチャイルド 1990”に小学生で出演していた田城美怜さんが、制作として参加し、二人の子供たちと共に演じたのです。30 年前の小さな“思い”の種は、こうして花を咲かせ、また実って、これからも続くと思信した瞬間でした。



“ヒロシマの孫たち”公演より

舞台照明という職業でなければ出会わなかったであろう人々、広島に生れなかったら芽生えなかったかも知れない、平和への祈り……不思議なご縁で多くの幸せをもらっています。

○メルマガ7周年記念シンポジウム「被爆100年後の広島をどう描く」

メルマガ前号で丸7周年を迎え、タイミングよく平和都市法制定70周年に当たるため、その法律をベースにした「被爆100年後の広島をどう描き、どう実現するか」をテーマに市民団体の立場でシンポジウムを開催した。

- ・開催日 2019年7月21日(日) 13:30~17:30
- ・会場 合人社ウエンディひと・まちプラザ、マルチメディアスタジアム
- ・参加者 約70人(定員112人)

○基調講演：「戦後広島の復興の軌跡から未来の姿を読む」

石丸紀興氏(広島諸事・地域再生研究所代表)

- ・最初に「広島は復興したと思うか?」「平和都市法が役立ったと思うか?」と客席に質問し、認識の度合いを確認。
- ・被爆40年史編さん時(1985年)に平和都市法、戦後の闇市、被爆建物が研究されていないことに気づき、早速研究に着手。
- ・平和都市法制定の前段階は国への陳情や請願だったが、埒が明かないと悟り、法律により復興を手助けすることに転換。
- ・当時の参議院議事部長寺光忠氏(広島市出身)が平和都市法の草案を作り、GHQの賛同を得ながら、1949年に国会で可決され、住民投票を経て、その年の8月6日に制定。
- ・平和都市法は効果てき面で、順調に復興が進められたが、理想の象徴として平和都市を建設するという理念は道半ば。広島を平和の都市づくりについて本腰を入れて研究すべき。



○パネルディスカッション：「次の世代と共に考えたいこと」

- ・パネリスト：石丸紀興氏(広島諸事・地域再生研究所代表)
渡部朋子氏(ANT-Hiroshima 理事長)
通谷章氏(ガリバープロダクツ代表)
- ・コーディネーター：前岡智之氏(メルマガ「まちづくりひろしま」発行人)



<印象に残った各氏の主な発言>

- ・渡部氏 広島は土徳の地、外から悩みを持って来られた方にやすらぎの気持ちを抱いて帰ってもらえるまちにしたい。核兵器廃絶を使命として訴え続ける市民のまちでありたい。平和と文化を集積し、研究する世界に開かれた学校が欲しい。平和を知らない紛争国の子供たちは美しいものを求めているので、アートや音楽などを発信できるまちであって欲しい。無言の証言者でもある被爆樹に会いに行けば、必ず何か感じるものがある。
- ・通谷氏 メルマガ12号の巻頭言「哲学は遺言書」から哲学について解説。現実的に考えて、核廃絶は難しいので、いかに上手に付き合っていくかが大事。若い人は理不尽なことに対してもっと抵抗してもらいたい。香港の中国化に対する学生たちの抗議デモには共感。民主主義を守るために必要な**基本的人権**を行使してもらいたい。
- ・石丸氏 丹下健三氏は平和記念都市の「記念」を後ろ向きと捉え、削除したが、将来に向けた記念と捉えて、前向きなまちづくりの取り組みができないか? 寺光氏が描いた平和の都市像「石ころの一つまでも世界平和を象徴」をどうとらえるか?(問題提起)
- ・前岡氏 平和都市法は平和を希求する市民の願いが込められていると信じたい。アメリカの高校生を案内したとき、原爆資料館で原爆の実相を見聞してから外に出たときに平和を実感して涙を流す。

○ワールドカフェ：「被爆100年後の広島を想像し、創造しよう」

基調講演とパネルディスカッションを終えて、休憩中に会場設営を行い、ワールドカフェが開場。1班4~5名で5班編成。

ファシリテーターより「これからの広島をどう描くか?」という問いかけで、対話がスタート。BGMのジャズが流れる中、コーヒーを飲みながら気楽に話し合える雰囲気作りが功を奏してか、会話が弾む。

(編集委員 瀧口信二)



○ワールドカフェに参加したホスト役・ファシリテーターの感想

石原悠一氏（ホスト役、アーティスト）

最初のメンバーは建築に携わっている方が多く、“建築”を話題の中心として話が進んだ。建築物の特性上、一度建てると数十年単位で街の構成要素となる。環境によって文化が築かれていくことを考えると、建築もまちへの影響や責任のある仕事だ。ただ、建築家も仕事であり、提案はできるが施主の意向に左右される。利便性や安全性からもうすこし踏み込んだ、**まちづくりの方向性を示す細やかな計画や法律**があってもよいのではないだろうか。

次のメンバーは、文化活動や国際協力活動をしている方、市内で職人をされている方などさまざまな分野の方がおられた。前メンバーの建築関連の話を受けて、一般に周知されていない個人敷地内等の被ばく建築が多くあり、その老朽化が進んでいる。保存するにも安全性や費用面での課題があるとのことだった。また、平和都市の望ましい姿についての話題になったときには、平和大通りを造設する際に、さまざまな地域から樹木が集められ植樹されたことに焦点が当たった。**植樹樹木地図**のようなものを制作して樹木巡りができるようにしたり、樹木の手入れや寿命に合わせた更新を**市民活動**として行ったりできたら良いという意見があった。さらに、被爆100年後の広島をまちを迎えるまでには、**AI（人工知能）**によるシンギュラリティ（AIが人間の知能を超える技術特異点）を迎えているはずだという話から、AIがまちづくりにどう関わっていくのかという議論にもなった。

まちづくりには**精神の継承と活動の継続**の両輪が重要だ。都市の人口推移や経済状況、国際動向など、様々な要素により変化し続けるなかで、その環境の特異性をもつ文化を次世代へどう受け渡していくのか。その環境の構成要素が、地形などの自然の制約ではなく、一回性の人類経験である場合では風化は切実な課題だ。今後、直近の出来事で安易に変化する輿論をうまく乗り越えながら、世論を形成し、冷静で温もりのあるまちづくりを進めることができるのだろうか。

松波静香氏（ホスト役、ギャラリーG、キュレーター）

「平和都市法」をきっかけとして、広島をまちづくりについて考えていることをテーマとしてディスカッションしました。想像していたよりずっと和やかな雰囲気の中、肩の力を抜いてお話しができました。

私がホストを務めたテーブルでは、まちづくりに携わっている職業の方が多く、それぞれの経験の中からのお話しを聞くことができました。印象に残った意見をご紹介します。

- ・広島を街が「平和都市」として機能しているかということ、平和公園以外はそのように感じられない。「都市」は物でもあるので、人の意識の中での「平和」だけでなく、**物としての「平和都市」の形**とはどういうものなのか、考えなければならない。
- ・「平和都市」には**緑が必要**。最近では再開発や企業ビルの移転、マンションやホテルの建設など、多く見られるが、このタイミングなら都市部にもっと緑を増やせる取り組みができるのではないか。
- ・パネルディスカッションで渡部朋子さんがおっしゃっていたように、様々な背景を持つ人々が安心して**集い、話し合いや交流を持てる場**があちこちにあればいい。
- ・広島を発信する方法の一つは芸術表現があって、平和都市を目指すには**表現活動の場**は不可欠だ。
- ・まちづくりは、行政任せではなく、行政と民間が一緒になって取り組む必要があるのではないか。**エリアマネジメント**の考え方が重要だ。

意識や考え方といった「ソフト」の面、インフラや都市の構造といった「ハード」の面での意見があり、まちづくりについてお話しをしようとする時は、このふたつがうまく絡んでいくことが重要になって来るのだと改めて思いました。

ワールドカフェというディスカッション方法は初めての体験で、ホスト役がうまくこなせ

たかどろかはわかりませんが、ここでしか出会えない方と、ほどよい距離感とリラックスした空気の中で語り合う、貴重な機会を頂きました。ありがとうございました。

高橋幸子氏（ホスト役、建築家、主に個人住宅設計）

結論から言えば、当初企画された意図の通り、幅広い年齢と立場の男女が参加し意見を述べ合う場を形成することに成功したと感じている。結論を出すものではないので、討議された内容をまとめることは難しいが、いくつかの方向性に分けて記録しておくこととする。討議は、平和都市としての広島を如何にして特徴づけるのかということに向かい、下記のような意見が出された。

- ・世界中の紛争の当事者が話し合う場を広島が提供する
→平和会議の開催
- ・平和をひとつの観光資源として活用する
→**平和の聖地とその巡礼**（原爆犠牲者は殉教者である）
→現在行われている平和会議をもっと発信する
- ・広島を基盤とする企業にも一端を担ってもらう
→**平和協賛金**を収めてもらう
- ・平和は暗い部分と明るい部分の組み合わせで伝えられるもの
→暗い部分とは広島**の焦土（原爆の地層）**を掘り起こすこと
→明るい部分とは現代の広島**のホストファミリーとの交流**など
- ・平和都市建設法の精神は広島の中に根付いているとは言えない
→もっと平和教育を充実すべき
→広島**の街を歩けばそれだけで原爆や復興を知ることができる、歩く街**にする
（平和大通りのなりたち、被爆建物など）
- ・**原爆の地層を保存展示**し、今の復興の下にはその地層があるということを示す
→誰の家だったか、どんな生活があったのか
- ・被爆者のその後の生活も伝えたい
→清貧だった**原爆スラムの研究**

当然であるのに私自身が想定していなかったことなのだが、広島**の現状**についての認識はあまりにも各々ばらばらであった。広島**の原爆投下**についてもっと世界に知らせなくてはと考えている人もいれば、日本**の中での、あるいは広島での周知**がまだまだだという人もいる。そうであるから、これから広島がなにをすべきか、どうあるべきかということについても全く異なる意見が出されることになる。私自身は、平和都市広島は、日本の国際交流を市民が先導していくべきだと考えており、これについて少し意見を聞いてみたかったのだが、まずは異なる立場の意見を聞くということに時間がかかり、その余裕はなかった。

パネルディスカッションにしばしば見受けられる問題だが、相対するパネラーを招いて有意義な討議を期待するも、あまりに隔たりが大きいと逆に討議にも至らないで終わってしまう。ワールドカフェでは、結論を出さないという方針がまずあるのだが、それでも討議を充実させるためには、最初にある程度参加者の共通認識を確認して、そこから始めるのが良いのではないだろうか。そうすれば、限られた時間内でより有効な討議ができるだろう。例えば、最初にワールドカフェのテーマに基づき、話したいサブテーマを参加者が提案する。それについて話したい人が1回目に同じテーブルにつくという方法をとれば、面白い討議が効率よくできるのではないかと思う。最終的には、それらを共有する。

しかし、この度のワールドカフェはまずこのテーマで開催するということが自体がひとつのきっかけとして意義をもっていたのである。これからより小さいテーマで重ねて開催をしていくことで深い討議、方向性をもった討議が生まれ、小さくても実際にまちづくりの動きへと繋がっていくことを期待したい。

そして最後に、貴重な体験をする機会をいただいた企画者の方々に感謝申しあげたいと思う。

片島 蘭氏（ホスト役、染織作家、市立大非常勤特任教員）

ワールドカフェでは、平和という言葉の認識、家族の対話から都市のデザインまで、様々な意見が出た。平和教育の限界、大人になってからの市民の無関心から、日常で触れることができる環境整備のアイデアが生まれ「**街全体で平和を感じるまち**」という共通項目のようなものが私のグループでは生まれた。

1. 「街全体で平和を感じるまち」

- ・平和大通りにある**全国の市町村から送られた樹木**や生き残った**被爆樹**は、**戦争や復興の歴史**を伝える。
- ・しかし、全てに説明が整備されておらず、ネットで調べると詳しく調査されているが、日常では認識が難しい。
- ・そこから、バスを待っている時に、ふと知ることができる環境づくりが必要ではないか。

2. 「平和の聖地」としてのまち

- ・広島を訪れた人が**恒久平和を体感**できる、具体的に感じるができることが必要であり、平和公園や似島以外でも平和を体感する場所、市民レベルで考えることができるようにしたいのでは。
- ・紛争地域の人々が対話できる場所として機能してはどうか。

3. 広島平和記念都市建設法について

- ・広島平和記念都市建設法の精神を守り続け、外見（ハード）の美しさだけでなく、内面（ソフト）を育てていく機能を作っていくことが必要だ。
- ・他の都市と違う、「平和」都市として機能を果たすべきだ。そのために、**平和の概念**をきっちり作り、戦争のない原爆のない、人類の平和を、人種民族を超えて希求することを広島から発信し続けていく、行動を続けていくことが大切だ。
- ・「二度とこういうことを地球上におこしてはいけない」と訴えた浜井市長の声と、家や食べ物や仕事が無いという、平和という言葉を使うのさえ大変な時代に作り上げた「平和都市法」の広島の理念を大切にしていきたい。

4. 都市景観

- ・おりづるタワーはあの高さでよかったのか。原爆ドームの周辺の環境整備について、もう少し法の精神に則り作る必要があったのではないか。
- ・時代によって理想は変化する、だから今こそ考え直す必要がある。まちの経済活動の活性化は必要だが、中心部の景観の規制をした方がいいのではないか。市内では空き地が増え続けていて、駐車場になって、高層マンションになっているので、特に今注意すべきだ。

5. ヒロシマを継承

- ・平和教育が歴史の一環で、家族内で母が被爆したが、話したがらないし、孫と祖母の対話がない。しかし、家族の中からの対話から、リアルティを持って知らなかったことを知る必要がある。
- ・子供達への平和教育の充実と広島の人こそ資料館を見るべきだ。8月6日8:15を知っている人が減る中で、もう一度歴史を振り返る必要がある。

グループのみなさま、貴重なご意見をありがとうございました。

築島 渉氏（ホスト役、天ライターズ代表、企画戦略など）

広島出身では無い私だが、偶然にもこの30年ほどを長崎と広島というふたつの被爆都市で過ごしてきた。長崎での学生時代には故・谷口稜暉さんのお宅で海外の学生たちと生活をともにし平和について語り合ったりと、長崎に暮らす若者としての責任を果たそうと努めていたと思う。

長崎出身の祖父母や父は被爆していることもあり、何かしなければという思いも若い当時は強かったのかもしれない。しかし広島に移住してからは、恥ずかしながら一切「平和」や「核廃絶」といった活動には参加したことがなく、今回お誘いいただいたのは私にとって大変良い機会となり、この場を借りて御礼を申し上げたいと思う。

私が担当させていただいた班では、戦後長い月日が経過し、「平和」という言葉が抽象化していく中で、平和都市・広島役割までも漠然化しているのではという指摘が飛び交った。例えば、第一回の平和宣言が行われたのは昭和 22 年、日本がまだマッカーサー元帥率いる GHQ 占領下にある頃。その状況下にも関わらず当時の浜井市長は、原子爆弾について、広島を「暗黒の死の都」へと陥れた「**恐るべき兵器**」であったと表現し、それを体験した広島こそが「全身全霊をあげて**平和への道**を邁進し、もって**新しい文明へのさきがけ**となるべきだ」と明言している。

担当班であがったのは、戦争における生と死、その闇を現実としてありのままに見据え、その中から真の平和を希求する浜井市長の意思が、当時の重みそのまま引き継がれているのかという疑問、いわばヒロシマが発する「平和」という二文字が、本来意図された意味から剥離し、漠然としたきれいごとへと偏向しているのではないかという疑問であった。

また、ヒロシマであるからこそ可能ではないかというアイデアも多く出された。例えば広島を「平和都市」として、賛同する世界中の人に**市民証を発行**するという推進活動。SNS（会員制交流サイト）が発達した現在であれば、**バーチャルな「平和都市 HIROSHIMA」を設立**することで、すぐにでも実行可能なアイデアであるように思う。

短時間ながら私よりもはるかに経験と知恵のある方々と膝をあわせてお話できたことは、私にとって大きな財産となった。

松山渉氏（ファシリテーター役、中国セントラルコンサルタント、都市計画担当）

どういうわけかいろいろと言いたいことがある人が多いのだな、というのが一番の感想です。だからなのか、会話は弾んでいたようなので、まずまずの出来栄えだったのではないのでしょうか。ただ、自分は全体進行役だったので、各テーブルで、どのような会話が行われたのかは、よくわかっていません。この点は、ホストの方々の意見を聞いてみたいと思います。

個人的な感想としては、テーブルの外側からみた World Caféの様子と、第 2 回目の開催に向けての課題について、気になったところを言わせていただきます。

■World Caféの様子

メモを取るのが大変そう・・・。

ホストの方々には、Round ごとに話を展開していくためのメモ用に、ポストイットを手渡していました。ですが、テーブル配置上、中心にお菓子や資料を置くと、メモを取ったり、ポストイットを貼ったりする場所が限られてしまうため、横を向いてメモを取られたりして、少し窮屈そうな感じがしました。ホスト自身が後で見て、会話の内容を確認することができるように、メモの取り方は皆さんにお任せするほうが良いと思います。

また、事前登録をしていない方が、World Caféを見ているうちに、参加してみたいと思った場合、開催者側が会話に入りやすい雰囲気を作る必要があるのでは？と感じました。今回、気になったテーブルに途中参加する方が少しいらっしゃいましたが、周りをちらちら確認しながら、参加者やホストに言われて参加するという感じだったように思います。人数制限を考慮する必要はありますが、すぐ近くから会話を聞いていたいという方もいらっしゃるだろうし、個人的には、この方が、より気軽に会話ができている感じがします（World Caféの雰囲気に合っていると思います）。

■第 2 回目の開催に向けての課題

「これはチラシじゃなくて完全なる企画書」、広告業をしている友人の第一声でした。

World Caféへの参加者の募り方の工夫には検討の余地ありでしょう。特に若い人への参加を促す方法としては、チラシをより分かりやすくすること（登録方法にQRコードを活用することなど）や、開催者側が直接大学等に足を運んでお願いをすることなどが重要だと思います。

また、第 1 回目の様子をホストの方々にお願いして広く拡散してもらうことも大切だと思います（ホストの方々はある種のインフルエンサーでもあるため）。

募集期間については、単に長期間募集をかけるだけでなく、ある期間に集中的に募集をかけることで、開催を印象付ける方が効果的なのではないでしょうか（例えば、同じ日、同じ時間に SNS（facebook, twitter, instagram 等）で同時拡散をするなど）。方法はいろいろ考えられるとして、開催を印象付ける方法は必要なのではないかと思います。

○ 広島平和記念都市建設法制定70周年記念シンポジウム（広島市主催）

広島市・都市計画学会中国四国支部主催シンポは広島平和記念都市建設法（以下、平和都市法）と長崎国際文化都市建設法の制定70周年を記念し、二つの法が復興に果たしてきた意義や役割を確認するとともに、これからの役割やまちづくりについて考える機会となった。

- ・開催日 2019年7月13日（土）13:00～16:00
- ・会場 広島平和記念資料館東館「メモリアルホール」
- ・参加者 250人（定員300人）

○プロローグ（特別法等の紹介）

- ・「**広島**の平和記念都市建設について」：萬ヶ原伸二氏（広島市都市整備局都市計画担当部長）
平和都市法の制定プロセスや法の内容を説明し、法に基づく平和記念都市建設計画の平和記念公園、平和大通り、河岸緑地など具体の事業を紹介。
- ・「**長崎**の国際文化都市建設について」：片江伸一郎氏（長崎市まちづくり部長）
広島の平和都市法と同時進行で制定された特別法。国の援助により土地区画整理、平和公園、長崎国際文化会館などを建設。その後、現在までの都市づくりの進捗状況を説明。

○基調講演：「これからの世界で輝く平和記念都市」：篠田英朗氏（東京外国語大学大学院教授）

- ・1999年から13年間広島大学に勤務し、2013年度から現職で紛争地域における平和構築活動について研究。2007年から外務省委託「平和構築人材育成事業」に関わり、現在、広島平和構築人材育成センター代表理事。外国人に広島を語る経験を通じて感じたことを話す。
- ・「ヒロシマ」という単語は世界で流通している日本語の1、2位。世界初の被爆地、復興の歴史、平和を記念した都市づくりのストーリー性が人を引き寄せ、平和について考える人々が出会う場所となる。
- ・広島を知りたくてやってくる訪問客に尊敬の念をもって対応できる環境を整え、訪問客を含めた平和教育を推進することにより、平和記念都市のブランド化を図る必要がある。



○パネルディスカッション：「令和の時代における平和都市の役割」

- ・パネリスト：篠田英朗氏（東京外国語大学大学院教授）
藤原章正氏（広島大学大学院教授）
朝長万左男氏（長崎大学名誉教授）
佐藤 緑氏（ハーストリープラス代表）
- ・コーディネーター：佐田尾信作氏（中国新聞特別論説委員）



<印象に残った各氏の主な発言>

- ・**藤原氏** 警備会社の保障条件として戦争や紛争は除外され、平和が前提。この法律に基づくインフラ整備により軍事都市から平和都市へ転換。平和都市の理念を実現するために、平和教育のための国際拠点を広島に置くことを提言。
- ・**朝長氏** 原爆は今も人を殺し続けている非人道的兵器。核廃絶には倫理面の知恵が必要。この法律のソフト面の機能を充実していく必要がある。事前に原爆資料館を見てから国際会議を開くと参加者の姿勢が全然違う。核保有国の元首級が原爆資料館を見て感じて核廃絶への行動を心に刻んでほしい。受け身ではなく、海外発信をしていかなければ、訪問者が少ないロシアや中国などに長崎、広島の願いは伝わらない。
- ・**佐藤氏** 市民が平和都市としての自覚を持って自分の言葉で話ができるようになること。子供のための平和学習はあるが、社会人や母親になってからの学習も大事。親から子へと伝えることにより継続性が維持される。絵の力で原爆の恐ろしさを語り継ぐのも一方策。
- ・**篠田氏** 広島と長崎は姉妹都市だが、より一層連携を深めたらよい。広島は平和都市としてのアイデンティティが浸透している。被爆者による証言が貢献か。広島に来てもっと知りたいという人が増えているので、この法律の理念をさらに活かすべき。
- ・**佐田尾氏** 寺光忠氏は広島平和記念都市建設法の「広島」、「記念」、「建設」を除いた平和都市法の方が高邁な理念に合致していると考えていた。インフラ整備への適用は役割を終えたので、これからはいかにこの法律の理念を活用していくかが課題である。

（編集委員 瀧口信二）

○ 「時代を語り建築を語る会 (第25回)」 報告

語り人：中川利國氏 (元広島市被爆70年史編修研究会事務局長)

～被爆70年史の編修を終えて～

被爆70年史編さんの要役として編修研究会を仕切られた立場で、70年史の表裏にわたる興味深い話を聞くことができた。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表：石丸紀興)

日時：2019年6月28日 (日) 18:30～20:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



略歴：1979年広島市役所入庁。企画調整局及び教育委員会の文化課で博物館建設担当。2011年公文書館長。2014年から2019年3月まで被爆70年史編修研究会事務局長。

☆ 被爆70年史編修方針

- ・私の役割は金と人を集め、監督に委ねる映画のプロデューサーのようなもの。市の中で予算要求をし、組織を新設し、編修研究会を設立。
- ・基本的なテーマは「被爆50年史」を踏襲し、「都市と市民生活」とする。ただ被爆直後から始まる「50年史」とは異なり、明治の市制施行前後から始まる広島の近現代史120年とし、原爆被災を挟んで戦前から戦後への移り変わりを「復興」・「継承」・「変容」の観点から眺める。
- ・「50年史」は写真を多用しビジュアルで評判も良かったが、歴史の詳細はつかめない欠点があったので、「70年史」では内容の充実を図った。
- ・市政100年(1989年)を記念して、比治山ABCC移転後の跡地に近現代史を対象にした広島市博物館を構想。その開館準備を担当し、資料調査研究などの経験が70年史に生かされた。

☆ 戦前・戦後の広島市史編さん史

- ・戦前に広島市初の「広島市史」(通称「大正の市史」)編さん。「大正の市史」ができた大正末期から約40年間の「概観広島市史」(1955年)は、急激な都市化と原爆被災による壊滅、その後の復興を一つの歴史と捉えて編さん。
- ・引き続き「新修広島市史」全7巻(1950～61年度)、被爆30周年の「広島新史」全13巻(1975～85年度)、被爆40周年の「被爆40年史 都市の復興」(1985年度)、市制100年・築城400年の「図説広島市史」(1988年度)、被爆50周年の「被爆50周年 図説戦後広島市史 街と暮らしの50年」(1992～95年度)が編さんされている。

☆ 被爆70年史編修の歩み

- ・2014年度に被爆70年史編修研究会を発足させ、事務局を市公文書館に設置。10名の学識経験者からスタートし、最終的には21名になる。その他のコラムなどの執筆者を加え、計28名が執筆にあたる。2017年度までの4か年事業として着手し、2018年7月に発行。
- ・本編は各時代ごとの代表的なテーマを時系列で編さんする通史編と美術・音楽・スポーツ・映画のテーマごとに戦前から現代までをまとめる特論編に分けた。その他にコラム6編、年表編、グラビアページを加え、巻末の付録として映像編をDVDに収めた。

☆ 軍都「広島」への新たな視点

- ・過去の広島の軍都論は、山陽鉄道の広島開通と宇品港の二点から説明。70年史記述「近代の戦争と広島」によると、全国から大量に集結した軍隊を宿泊させる民家宿営を可能とする大きな町であったこと、日清戦争後も軍の兵站能力の集積(陸軍三支廠)があり、外洋に面していない利点があったことが軍都であり続けた要因ではないか。

☆ 都市計画事業から近現代を俯瞰する

- ・1919年に都市計画法が6大都市に適用され、広島など25都市は1923年に適用。その頃から大広島構想が持ち上がり、広島の都市計画、宇品港改修、太田川改修に着手したが、戦争で中断。その3大都市計画事業が戦後復興「請願」へと継承され、変容していく。
- ・「広島平和都市構想案」(1949～50年)は平和都市法を活用して、米国からの見返り資金(援助・融資)を狙って働きかけたもの。

☆ 会場からの意見

- ・今後の市史編さんについて?→70年史の残り火を受け継いでほしい。常設の組織は無理なので、公文書館などで日常的な記録を残し、大学などで調査研究を深めてほしい。

(編集委員 瀧口信二)

川がある街の風景

公共建築協会中国事務局長 河村美彦

広島市の歴史をひも解くと、戦国時代、五箇村（ごかむら）と呼ばれていたこの地が、太田川の水運、瀬戸内の海運、そして山陽道が交わる要衝の地であることに目を付けた毛利元就の孫、毛利輝元が天正17(1589)年、吉田郡山城から広島城に居城を移したことに始まります。

広島の名の由来は、太田川河口の三角州に、島（州）が広がっていたことから広島と名付けられたようです（諸説あります）。その頃の海岸線は今の平和大通り通りだったようです。

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元公は長門・周防の地に転封となり、尾張国清州より福島正則公が入城、元和5(1619)年には、大洪水で被災した広島城を無断改修した咎で信濃川中島に転封となりました。

その後、紀伊和歌山より徳川家と姻戚関係にある浅野長晟公が入城、以来浅野家の居城となり、12代にわたり約250年、明治維新まで続きました。今年浅野長晟公入城400年となることから、広島では様々なイベントが開催されています。

福島氏の代には、内堀、中堀、外堀の約1km四方の城郭と、山陽道の広島城の南側への付替えなど城下町づくりが本格化し、潮の干満が大きい河口域の川岸に、船を着ける雁木（階段状の構造物）が造られたのもこの頃です。

浅野氏の代には、大規模な干拓事業が行われるなど、現在みられる市街地の骨格がほぼつくられました。街の生い立ちからも分かるように、太田川下流域は洪水や高潮にたびたび見舞われ、橋の架け替え、川の浚渫、護岸整備などの改修が繰り返されてきました。

時は移ろい、明治維新以降、広島城の外堀、中堀は埋め立てられ、車や市電が行き交う道路となり、城南通りや八丁堀、薬研堀などの通り名や町名に、かつて城下町だった名残がみられます。

広島市街地の水面割合は約1/8を占め、川辺の緑地空間とあいまって“緑豊かな潤いやゆとり”ある空間となっており、太田川放水路の完成によって、それまで悩まされ続けてきた洪水による大きな被害は出ていません。

京橋川沿いには、かつて使われていた雁木が今でも見られ、往時を偲ばせています。また、広島では全国に先駆け河川空間のオープン化に取り組んでいます。川沿いには小洒落た“水辺のオープンカフェ”が軒を連ね、市民や観光客で賑わっています。

このように、先人が営々と築き上げ護ってきたこれらの市民遺産を、次の世代へと引き継いでいく義務と責任が、私達世代にあるのではないのでしょうか。



橋を渡る市内電車



京橋川の雁木群



雁木から見る原爆ドーム



京橋川沿いのオープンカフェ

□ 編集後記

個人の生活や日々の思考の広がりや制限され、いつの間にか無意識に無関心に陥っていくことの不安を打ち破るには、「まず一歩前へ足を出すこと」。これは、メルマガを媒介とする私たちの合言葉です。実際、昨日から今日、今日から明日へと時代は途切れることなく継続しているはずですが、元号が変わることで何か新しいことが始まり、加速していく風潮が感じられます。

政治的な背景もありますが、都心の活性化やアストラムラインの延伸などこれまで遅々として進まなかったプロジェクトが一斉に進められています。一方、災害復旧や身近な生活環境の整備等は同様には進んでいません。限られた財源を明日のひろしまに向けて有効に活用していくために今一度計画的、総合的にひろしまのまちづくりの目標を再確認して考えるべきです。

このたびのシンポジウムでも**広島のこれから進むべき方向（平和都市の実現）**を明らかにして、その実現に向けて計画的に総合的に進めていくことが重要であると再確認されました。

おりしも、市では基本構想と基本計画の改定作業を進めており、現在そのたたき台に対する市民意見を募集しています。まさに「まず一歩前へ足を出すこと」により、ここまでのまちづくりの再確認と再構築の時がきました。

(編集委員 前岡智之)

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第26回)」開催

- ・語り人：千代章一郎氏（島根大学教授）
- ・テーマ：ル・コルビジェの世界観・建築観を語る
- ・開催日：2019年9月28日（土）15：30～17：30
- ・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室C（北棟5階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加申込：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

***メルマガを読まれたの感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表